

現代短歌 アンソロジー

〈原発〉二十八首

吉川宏志 「塔」短歌会選者

Hiroshi Yoshikawa



東日本大震災の以前に、原発はどのように歌われていたのか。これが今回のテーマである。したがって、最近の原発事故後の歌は一切入れていない。

私の探し方が悪いせいもあるのだろうが、歌われた作品は非常に少ないように思う。地元の人以外で、積極的に詠んでいる歌人はあまりいない。原爆や核実験などの歌は多いのに、原発への関

心は低かったようなのだ。ぜひ、皆さんも原発の歌を探していただきたい。さまざまな歌が集まったとき、戦後の日本の重要な側面が見えてくるはずである。

少ない歌の中にも、原発と国家の問題に鋭く切り込んだ歌や、現在を予言したような歌があつて、印象深かった。現実の後追いはなく、未来を先取りするような歌も大切なのではないか。

潮けぶりせるかの岸にあたらしき灯を連ねるし原子力研究所

宮 柁二『獨石馬』

●昭和四十一年作。前年に東海村で原子力発電が初成功。

佐世保市にひとを診に來て原子力潜水艦を見てかへりゆく

二宮冬鳥『西笑集』

●作者は長崎で被曝した医師であった。静かな怒りがこもる。

出港を阻むと「むつ」を取り囲むあまたの漁船いたく小さし

久保民次郎『昭和萬葉集 卷十九』

●昭和四十九年作。「むつ」は放射能漏れを起こした原子力船。

原子炉の温排水はテトラポット囲む日本海の岸に渦巻く

金津文枝『昭和萬葉集 卷二十』

●昭和五十年作。日本各地に原発が増えていった時代の危惧。

チェルノブイリに四度人なき秋あらむ語らぬことを思ふしばらく

竹山 広「一脚の椅子」

● 当時はあまり情報がなかった。原爆を体験した歌人の思い。

さみだれにみだるるみどり原子力発電所は首都の中心に置け

塚本邦雄「魔王」

● 本当に安全なら都市に作れ、と訴えた人は少なくなかった。

にこやかに核ニユクリクスの神官の予防着厚くわれをいざなふ

岡井 隆「ウランと白鳥」

● 六ヶ所村の核燃料工場。原子力に仕える「神官」と捉えた。

なにがなんでも悪あくとう論理に組し得ず文殊円屋根を雲の影はしる

永田和宏「荒神」

● 高速増殖炉もんじゅ。危険が叫ばれるが、あえて是認する。

燃料プールまぶしく青く見ゆるのは北上川ゆ引かれ来しみつ

大口玲子「ひたかみ」

● 女川おながわ原発を見学。美しい水が原発に使われる現実の悲しさ。

いつ爆ぜむ青白き光を深く秘め原子炉六基の白亜列なる

佐藤祐禎「青白き光」

● 福島第一原発の事故を予感していた歌。重く響く一首だ。

つひにひとりが国家に消盡さるるさま 大内さんの血が止まらない

大辻隆弘「デブス」

● 東海村の臨界事故の死者。国が個人を犠牲にする酷薄さ。

テレビのなかの、病院の、もつとも奥の部屋に 被曝死をせる人の色はも

米川千嘉子「一葉の井戸」

● 同じ死者を歌う。目に見えぬ死の凄惨せうさんさを深く想像する。

退避要請区域確かめほの光る南南西の空を見つめる

田中拓也「夏引」

● 作者は東海村の事故を身近に体験した。緊迫感が漂う。

さくさくと梨の実を噛む此処までは汚染とどかぬと思う秋の日

上野久雄「冬の旅」

● 同じ事故。どこまで汚染されたかという問題は常に起きる。

根の国に持つてゆけない原発の永遠に残るみぎはに錆びて

梅内美華子「エクウス」

● 作者は青森出身。処理ができない原発の不気味さを歌う。

チェルノブイリ「石棺」の壁をつたひゆく鶯の青葉よ 青の根源

小池 光「静物」

● 原発を覆う壁に生える植物。それに生命の極限を見る。

帰郷いつも夕刻のこと赤き灯をともして立てる原子炉排気塔

真中朋久「エウラキロン」

やはらかきふるき日本の言葉もて原発かぞふひい、ふう、みい、よ

高野公彦「天泣」

夢に見るわれは抜け髪チエルノブイリ汚染地域の雨にまみれて

道浦母都子「青みぞれ」

原子炉に勤むるわが子アラビアの如き砂上の社宅ゆききす

木村捨録「葛の花」

原発の排水口で釣りしこと妻には言はず形よき鱸すずき

上田善朗「三方五湖」

原発の炉心の亀裂ひびを知りてより漏るるが如き夕べのあかね

波汐國芳「マグマの歌」

いやおうもなし通帳に「原子力立地給付金」振り込まれる

田宮朋子「雛の時間」

事故ありて十年あまりしろがねの鞘管冷えてもんじゆは眠る

紺野万里「星状六花」

原発の局部事故なれど外国のアーチスト公演の不可を伝え来

奥村晃作「ピシリと決まる」

「げんぱつはそんなにわるいものですか。父は部品を売つてますけど。」

大松達知「スクールナイト」

核の塵かくやすらかに降る夜を聖夜と言いて祝ぐ、人は

谷岡亜紀「臨界」

セシウムやストロンチウムを含有せし乳房かなしもをさな子を抱く

北久保まりこ「ウィル、ウィル」

● 平成五年の歌集より。現在を予言していたような歌だ。

● 五十以上ある。数え方を変えても現実には変わらないが。

● 作者は平成七年にチエルノブイリを取材したという。

● 海辺の広大な砂地に施設があるのだろうか。比喩が独特。

● 作者は敦賀市の人。共存と違和の間で揺れ動いている。

● 福島で原発を批判し続けてきた作者。暗い怖れが伝わる。

● 金で住民に認めさせようとする姿勢への疑問と不信。

● 福井の作者。美しい歌だが目覚める日への怖れもこもる。

● 外国からの視線により、事故への認識が揺さぶられる。

● 学校の生徒からの反論。公の場で原発を批判する難しさ。

● 平成十七年の歌集の中の一詩だが、先見性に驚かされる。